

フタオビコヤガの発生消長と育苗箱施用剤による防除

古川農業試験場

1 取り上げた理由

イネの食葉性害虫であるフタオビコヤガ(イネアオムシ)は、近年、発生量が増加しているが、水田内における成虫および幼虫の発生消長の知見は少ない。そこで、本種の水田内における成虫および幼虫の発生消長について明らかにした。また本田初期害虫防除に加え、チョウ目害虫に対して防除効果が高いとされるジアミド系(成分名:クロラントラニリプロール)とマクロライド系(成分名:スピノサド)の育苗箱施用剤によるフタオビコヤガ幼虫の防除効果を検討したところ、高い防除効果が得られたので参考資料とする。

2 参考資料

- 1) フタオビコヤガ成虫は、5月上旬～下旬(越冬世代)、6月下旬～7月上旬(第1世代)、7月中旬～8月上旬(第2世代)に発生する(図2, 図4)。
- 2) フタオビコヤガ幼虫は、5月下旬～6月中旬(第1世代)、7月中旬～下旬(第2世代)、8月上旬～下旬(第3世代)に発生する(図3, 図4)。発生密度は、世代が進むにしたがって、高くなる傾向がある(図3)。
- 3) クロラントラニリプロール剤, イミダクロプリド・スピノサド剤の育苗箱施用剤は、ともに第1世代～第3世代幼虫に対する防除効果を示した(図2, 図1)。

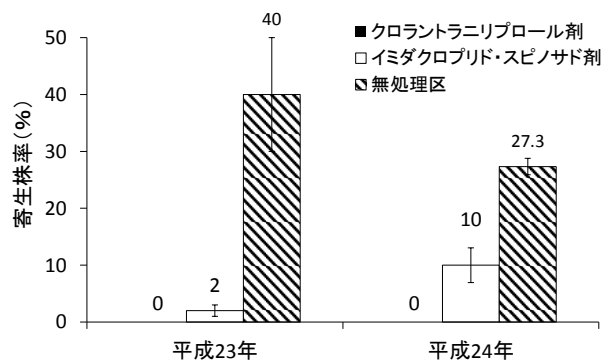


図1 フタオビコヤガ第3世代幼虫に対する育苗箱施用剤の防除効果

注) 寄生株率は、加害量が最も多くなる第3世代幼虫(平成23年:8月10日, 平成24年:8月1日)の値を示す。

寄生株率=幼虫寄生株数/調査全株数×100

図中の数値は、平成23年は2反復の平均値, 平成24年は3反復の平均値を示す。図中のバーは標準誤差

3 利活用の留意点

- 1) 無処理区は殺虫剤成分を含まないプロベナゾール剤(商品名:Dr.オリゼ箱粒剤)を使用した。育苗箱施用剤は、クロラントラニリプロール剤(商品名:Dr.オリゼフェルテラ箱粒剤, ファーストオリゼフェルテラ粒剤)とイミダクロプリド・スピノサド剤(商品名:ルーチンアドスピノ箱粒剤)を使用した。
- 2) 薬剤の使用に当たっては、最新の農薬登録情報を確認すること。

(問い合わせ先:古川農業試験場作物保護部 電話0229-26-5108)

4 背景となった主要な試験研究

1) 研究課題名及び研究期間

新農薬による病害虫防除に関する試験（平成23～24年度）

2) 参考データ

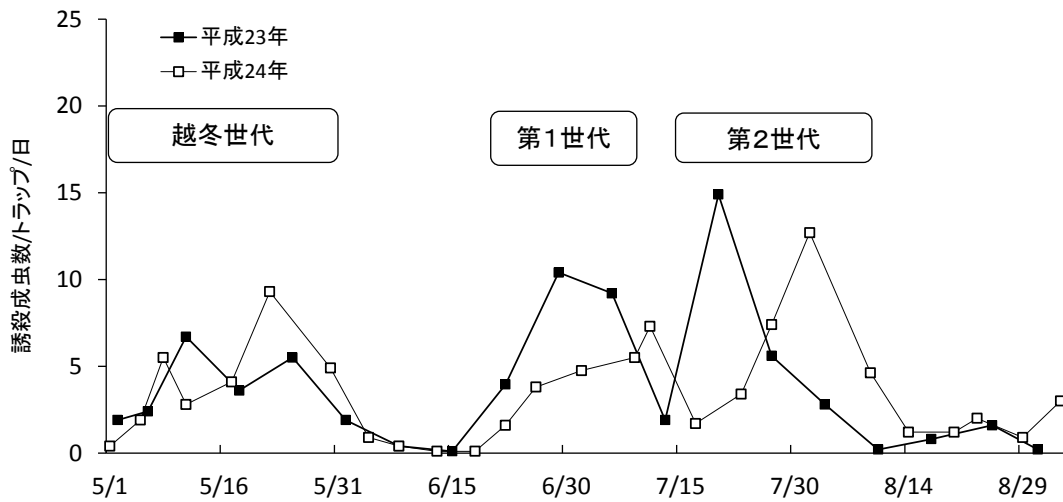


図2 フェロモントラップによるフタオビコヤガ成虫の発生消長
注)フェロモントラップは2カ年とも古川農試場内に設置した。

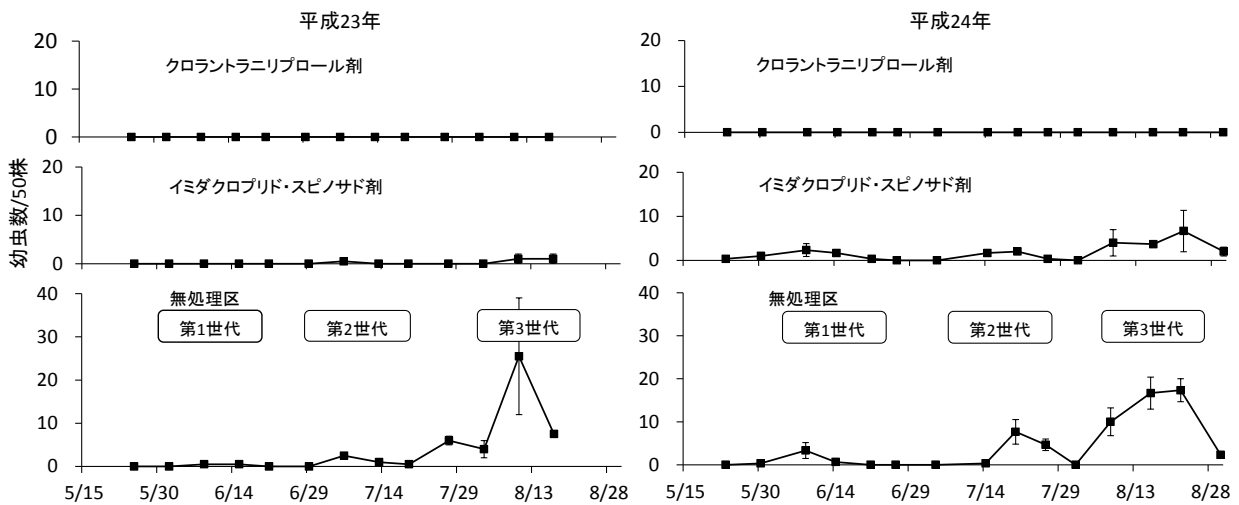


図3 フタオビコヤガ幼虫の発生消長に対する育苗箱施用処理の影響

注)払い落とし法（1株ごとパットに落ちた虫数を計測する）による幼虫数を示す。

平成23年は2反復の平均値，平成24年は3反復の平均値を示す。図中のバーは標準誤差
栽植密度は30cm×20cm

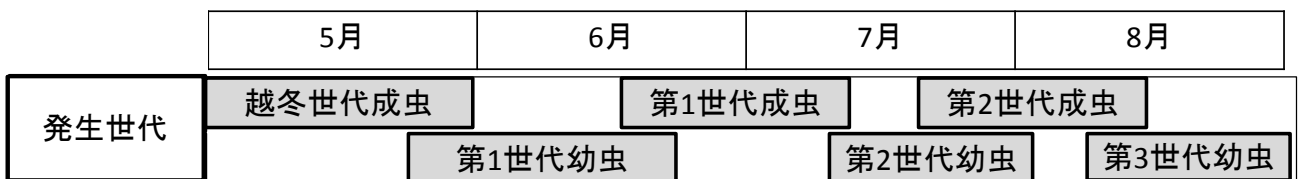


図4 宮城県におけるフタオビコヤガの発生消長（模式図）

3) 論文発表等 なし